

卒業論文執筆の手引き

2021 年度入ゼミ生用（2021 年 4 月）

専修大学人間科学部 金井雅之ゼミナール

1 はじめに

卒業論文（必修8単位）は、大学で4年間勉強してきた成果を集大成し、形に残すものである。

大学での勉学とは、高等学校までと異なり、講義や演習で学んだことをもとに自分自身で研究テーマを設定し、研究を進めることである。したがって、大学を卒業した証しとは、たんに一定の知識を身につけていることではなく、自分自身で発見して研究したあるテーマをもっていることである。これが卒業論文であり、それは形式的な学位記（＝卒業証書）に実質的な内容を与える、真の意味での卒業証明書といえるだろう。

ここで、大学を卒業した人のうちいわゆる研究者（大学などの研究機関に勤め、研究をおもな職務とする人たち）になるのはほんの少数である、という疑問をもつ人がいるかもしれない。おおくの人には企業や官公庁などに就職し、かならずしも専門的でない職種に従事するかもしれない。そういう人たちにとって<研究>をしたという実績はどのような意味をもつのだろうか。

じつは<研究>とは、いわゆる研究者のみがおこなうことではない。実社会において、人や組織が活動していく上でさまざまな問題が生じてくる。そうした問題をまず定式化し（＝何が問題なのか）、先行事例やデータなどの情報を収集し、推論や実験などによって解決の道筋をつけることは、どんな職業・どんな職種に従事する人たちにとっても必須の作業であるが、これが広い意味での<研究>という活動なのである。つまり<研究>とは、問題を見つけ、客観的事実にもとづいて、論理的推論を通じて、解決策を見つける、という人間のある種の高度な知的活動を意味している。こうした知的活動をおこなうためには、もちろん自然や人間や社会にかんする基礎的な知識の蓄積が必要であるが、それは基本的に高等学校までの初等中等教育で達成されているはずである。大学における高等教育の目的は、そうした知識を実際に活用して真の<研究>をおこなうための各種のノウハウを伝達し、実際に卒業論文執筆などの形で体験（実習）させることにより、社会に出てから自分の能力を最大限発揮し、人びとの役に立てる人材を育てることにある。

大学を卒業した後、企業や官公庁などさまざまな職場で働くおおくの人にとって、卒業論文は生涯でもっとも完成度の高い研究論文となるはずである。それは自分にとって一生の記念であり、またさまざまな困難に直面した際の自信の源となるものである。渾身の力を投入して立派な卒業論文を仕上げることを期待している。

2 卒業論文作成のスケジュール

2.1 本ゼミナールでの指導方針

大学に進学できるかどうかを決めるのは、家庭の経済的豊かさだろうか、それとも両親の教育に対する姿勢だろうか？ 若い頃に正社員になれないと、その後の人生は不利になるのだろうか？ 結婚したくてもできないのは、どのような人たちなのだろうか？（他の国では必ずしもそうではないのに）なぜ日本では、仕事と家庭生活との両立が男性ではなく女性だけの問題とされているのだろうか？ これらはすべて、私たち一人一人の人生(ライフコース)にかかわる問題である。個人の生き方の違いが、本人が自分で決めたことだけではなく、生まれた家庭や性別といった本人には選べないことがらによっても影響されているとき、社会学ではそこに、さまざまな社会制度（家族、学校教育、労働市場など）によってもたらされる格差や不平等が存在すると考える。

格差や不平等を生み出す制度は、個人にとっては自分の自由な生き方を制約する厄介なものに見えるが、制度はそもそも私たち自身の普段の行為の積み重ねによって生まれたものである。この「社会」と「個人」との間の、互いに原因となり結果となる循環的な因果関係（メカニズム）を、論理的かつデータに基づいて解明することは、社会学の重要な課題のひとつである。そこで本ゼミナールでは、ライフコースにおける格差・不平等にかかわる諸問題を、以下のアプローチで解明する卒業論文を執筆する。

【必須の要件】

◇ 研究対象とする社会や集団の特徴を正確に反映する科学的手続き（＝無作為抽出法）によって得られた統計的社会調査データを、計量的手法を用いて二次分析し、理論や先行研究に基づいて設定した仮説（「説明」であることが望ましいが、テーマによっては「記述」でも可）を検証すること。

【追加すると望ましい方法（どれか1つでもかまわない）】

- ◇ 自分でおこなう聞き取りや参与観察等の事例的社会調査による、因果過程の追跡的解明。
- ◇ 数理モデルやシミュレーションによる、仮説の導出や因果メカニズムの解明。
- ◇ 2ヶ国以上の無作為抽出調査データを用いた、国際比較計量分析。

2.2 論文作成の手順

論文を作成するための具体的な手順は、おおむね以下のとおりである。ただし、特に①～③は最初に決めた方針が成功する保証はなく、何度もやり直す必要が出てくることが多い。また、⑤の推敲過程も思いのほか時間がかかる。何事も早めに取りかかることが大切である。なお、文献情報の管理も日頃から心がけておこう。

- ① リサーチ・クエスチョンの定式化
- ② 先行研究（論文・著書・報告書・データなど）の収集・整理、仮説の構築
- ③ データの収集・整理、調査、モデル構築・解析
- ④ 本文の下書き（ドラフト）の執筆
- ⑤ ドラフトの推敲

2.3 スケジュール

3 年次

3 年次の 12 月初旬までに〈習作論文〉を執筆することを義務づける。
字数は卒業論文よりも短い、通常の学術雑誌に掲載されるような、完結した論文である。
おおむねつぎのようなスケジュールを目安に計画的に準備を進めること。

前期：①～③。

夏休み：④～⑤。後期初回ゼミで初稿提出。

9 月～12 月初旬：⑥。12 月初旬のゼミで最終稿提出。

4 年次

〈習作論文〉の執筆経験を踏まえて、卒業論文の執筆に専念する。多くの場合、卒業論文の内容は習作論文の延長上に位置するはずである。

前期：習作論文完成後就職活動を計画的に進め、終わり次第卒業論文にとりかかる。

12 月中旬：卒業論文提出，1 月：口述試験

3 論文の内容

本章の内容は、〈習作論文〉にも〈卒業論文〉にも、ともにあてはまる。

3.1 一般的注意

論文とは、自分が設定した具体的な問い（research questions）について、学術的見地から客観的事実にもとづいて論理的に議論を展開し、問いに対する明確な回答を提示するものである。

これはつぎの 2 つのことを意味する。第一に、論文はいわゆる作文や感想文、評論、新聞の論説（社説やコラム）などとはちがひ、自分の主観的な印象や感想や意見を述べるものではない。事実や証明可能な推論にもとづかない〈意見〉や〈主張〉や〈提言〉や〈心構え〉は書いてはならない。第二に、それは読書レポートや調査報告書でもない。先行研究をたんに整理しただけのものや、データをたんに羅列しただけで主張やメッセージがない文章は、論文とはいわない。先行研究や分析結果を踏まえつつ、自分自身でオリジナルな議論を展開しなければならない。

優れた論文を書くための確実な方法は、国内外の学術雑誌（journal）に掲載されている優れた論文（査読 peer review を経た論文が望ましい）をたくさん読み、論理展開の型を研究し、うまく模倣することである。本ゼミナールで執筆する計量系実証研究の場合は特に、論理展開に決まった型（パターン）が存在する。この型に沿って必要十分な情報が順次提供されていく論文は専門家にとって読みやすい論文であり、そうでない論文は読みにくい論文である。型に沿っていない論文が必ず質が低いとは限らないが、経験則的にはそのような傾向があると多くの専門家は考えている。なぜなら、よい研究とはデータの取り扱いや文章表現など細部への職人的な配慮とこだわりができて初めて可能になるものなので、こうした配慮ができない書き手は研究者としての能力自体が低い可能性が高いからである。よって、型に沿わない論文は読者に決してよい印象を与えず、実力よりも低く評価される可能性が高い。

3.2 論文の構成

本ゼミナールで執筆する計量系実証論文の構成は一般に以下のようになる。

1. 目的（研究の背景，先行研究，リサーチ・クエスチョン，仮説）
2. 方法（データ，分析手法，変数の操作化）
3. 結果（多変量解析の分析結果）
4. 結論（分析結果の解釈，学術的・政策的含意，リサーチ・クエスチョンへの回答，今後の課題）

1.a. 研究の背景

「研究の背景」では，研究の対象となる問題の現状はどうなっているか（統計データなどを示すのもよい），なぜそれは問題なのか（社会的にさまざまな困ったことを引き起こす **problem** なのか，常識や既存の理論では説明がつかない **puzzle** なのか），その問題が解明されるとどのようなメリットがあるか，ぎゃくに解決できないとどのようなデメリットがあるのか，などを説明する。

なお，ここで書くのはあくまでも学問上の理由であって，個人的な動機を書いてはならない。個人的な関心やきっかけから研究テーマを選ぶこと自体はむしろ望ましいことだが，論文として世に問うためにはその分野の学問的蓄積の枠内に位置づけられなければならない（先行研究の枠内に位置づけられないテーマは，卒業論文のテーマにはできない）。そのテーマに対して個人的な強い思い入れがある場合は，「謝辞」や「あとがき」のような場で触れることはかまわない。

1.b. 先行研究

そのテーマに関連する国内外の先行研究を包括的にレビューし，これまでに何がどこまで解明されているかを確認する。その目的は単に先行研究を紹介することではなく（先行研究の知見はすでにわかっていることなので，自分の論文の新しい発見であるわけではない），それらの問いに対してまだ解明されていない点（＝この論文の中で論じるべきこと）は何なのか，を読者に示すことである。先行研究で「何が論じられているか」は調べれば誰でもすぐわかることだが，「何が論じられていないか」は先行研究の知見を自分なりに整理して「考えなければわからない」ことに注意しよう。その意味で，先行研究からどういう未解明の問いを思いつけるかは，自分の研究の「オリジナリティ」の第一歩である。

なお，学問の世界において，「アイデアや知識が誰のものなのか」を正確に示すことは，決定的に重要である。学問的なアイデアや知識の生産には，膨大な時間と努力が必要である。通常なら金銭などの対価を払って使わせてもらってもおかしくないこうした無形の財産を，学問の世界では誰でも無償で自由に使うことができる。それは，こうした既存の知識を活用すれば，新しい知識を効率的に生産することができるからである。科学とは知識のこのような累積過程のことであり，先人たちの遺産を借りることによって（＝巨人の肩に立つ）自分が付け加えた新しい知識を，後続の世代に無償で譲り渡すという世代間のギブ・アンド・テイクによって支えられている。こ

うした先人たちの遺産を無償で使わせてもらうことの唯一の対価は、発見者の名前に言及すること（「クレジット」）によってその人に敬意を払うこと、具体的には論文や書籍などの出典を明示することである。このルールを守らずに、他人のアイデアをあたかも自分が発見したかのように詐称すること（^{ひようせつ}剽窃、盗作、**plagiarism**）は、研究者相互の信頼関係を破壊し、科学の健全な発展を阻害する、学問の世界でもっとも重大な犯罪行為のひとつであり、絶対におこなってはならない。

1.c. リサーチ・クエスチョンと仮説

先行研究レビューによってそのテーマで何が未解明なのかを明らかにできれば、それがすなわちこの論文の「リサーチ・クエスチョン」になる。リサーチ・クエスチョンとは、この論文内で回答可能な具体的な問いのことであり、記述（**description**）型と説明（**explanation**）型に分けられる。記述型の問いとは研究対象の「現状がどうなっているか」を明らかにするものであり（**how** の問い）、説明型の問いとは「なぜ（どのような因果メカニズムによって）その問題が起こるのか」を明らかにするものである（**why** の問い）。リサーチ・クエスチョンは1つの論文につき1つでなければならないわけではなく、論理的に関連するいくつかの問いを設定してもかまわない。計量系実証研究では、記述型よりも説明型のリサーチ・クエスチョンの方が高く評価される傾向があるため、少なくとも1つは説明型のリサーチ・クエスチョンを設定することが望ましい。

「仮説」は、リサーチ・クエスチョンに対する暫定的な回答（＝予想）である。記述型の問いであれば、たとえば「変数 X の値は年とともに増加するだろう」といった1つの変数 X の状態にかんする予想、説明型の問いであれば「変数 X の値が増加するほど、変数 Y の値も増加するだろう」といった2つの変数 X（原因）と Y（結果）との関連の仕方にかんする予想を立てる。この予想はもちろん単なる「直感」や「思いつき」であってはならず、どうしてそう予想されるのかの「理由」を読者に論理的に説得できなければならない。そのために通常利用するのが「理論」や先行研究の実証的知見であり、これらから演繹的もしくは帰納的に仮説の根拠を示すことが必要になる。理論や先行研究の知見を組み合わせると仮説および仮説の根拠を示すことも、これまでにはなかった新しいアイデアを生み出しているという点で自分の論文の「オリジナリティ」の一部であることに注意しよう。なお、リサーチ・クエスチョンを複数設定した場合は、それぞれのリサーチ・クエスチョンに対して少なくとも1つずつ仮説（＝回答）を立てる必要がある。1つのリサーチ・クエスチョンに対して2つ以上の仮説を立てることも差し支えない。

2. 方法

本ゼミナールの論文では、既存の量的調査データの二次分析をおこなうのが基本である。そのデータの標本設計や実施方法、回収率など、データの信頼性を読者が判断するのに必要十分な情報を提供する。

方法では、仮説を検証するために用いる計量的手法（通常回帰分析やイベントヒス

トリー分析などの多変量解析)と、分析に投入するすべての変数の操作化と1変数および(主要な)2変数記述統計を示す。記述統計は冗長にならないように、なるべく少数の表形式にまとめるのが望ましい。

3. 分析結果

多変量解析の結果を、仮説と対応させて示す。ある仮説を検証するために複数のモデルを比較する場合は、可能な限り1つの表にまとめるのが望ましい。本文では主要な独立変数の効果(有意であるかや絶対値の大小など)について記述していくが、なぜそうなったのかの解釈(interpretation)や理論的・実践的含意(implication)はここではなく、次節の「考察」で議論する。

なお、結果の頑健性(robustness)を示すことも重要である。標本調査データの計量分析は確率論に基づいて母集団のパラメータを推定するものであり、分析結果には誤差がつきものだからである。変数の操作化を変えてみたり(たとえば学歴を初等/中等/高等教育ではなく教育年数にしてみるなど)、別の分析手法を試してみたり(たとえば回帰分析の代わりに順序ロジット回帰分析など)しても定性的な結果(仮説の真偽)が変わらないことを示すことによって、読者への説得力を増すことができる。

4.a. 考察

多変量解析の結果を踏まえて、それらの解釈や含意を論じる。英語では discussion(議論)という用語を使うのが普通であり、単に自分が考えたことを独り言のようにつぶやくのではなく、読者はその結果をどう解釈するかを想像しながら、さまざまな観点から結果を吟味することが必要になる。この「考察」では、計量分析を行えることとは別の能力、つまり「思考力」が決定的に重要になる。ここでどのような説得的な議論ができるかが、論文全体の「オリジナリティ」の中核となる。

4.b. 結論

リサーチ・クエスチョンと仮説を再確認し、分析によって得られたそれへの回答を再掲する。「1. 研究の背景と目的」で提起した大きな問題関心に立ち戻って、この研究によって何が新しくわかったかを示す。必要に応じて、この論文で解明できなかった問題を今後の課題として示す。これは、自分や他の研究者がこの研究をさらに発展させるときの参考にするためであり、自分の力不足を弁解することが目的ではない。

文献一覧

先行研究を参照しない論文はあり得ないので、論文の末尾に文献一覧は必須である。文献の数は数10から100件以上にのぼることもあるため、MendeleyやEndNoteといった文献管理ソフトを活用することが望ましい。

3.3 論文のスタイル

◇ 学術論文における「スタイル」とは、見出しの番号や様式、文体、文字種の使い分け、図表の様式や参照方法、注のつけ方、文献の引用書式と書誌情報の記載の仕方などの約束事のこと

である。学術雑誌では必ずこうしたスタイルが指定されており、論文を投稿する際にはそれにしたがうことが義務づけられている。掲載する論文ごとにスタイルがまちまちでは、雑誌としての統一性が確保できないからである。

- ◇ 日本社会学会は日本でもっとも大きな社会学の学会なので、その機関誌『社会学評論』のスタイルは事実上日本の社会学における標準として位置づけられている。したがって本ゼミナールの習作論文と卒業論文では、『社会学評論スタイルガイド 第2版』（日本社会学会編集委員会 2018）にしたがうことを義務づける。

3.4 文体

- ◇ 『社会学評論スタイルガイド』で指定されているように、<である>調で執筆する。<です・ます>調や<だ>調（「～だ」）は使ってはならない。ただし、他人の文章を引用する場合は、もちろんこの限りではない。
- ◇ あいまいな表現、主観的な表現、自信のなさそうな表現は避ける。「～と思う」「～かもしれない」などの表現は使わない。データなどにもとづいて自信をもって証明できないことは、そもそも論文に書くべきではない。また、実際には客観的に証明できることを、謙遜してわざと控えめな言い方にする配慮は、学術論文では有害無益である。学問とは検証可能な推論同士のぶつかりあいであり、論文の評価はその内容自体によってのみ決まる。いかに論者の人柄がよくても、内容がなければ論文としての価値はない。
- ◇ 「？」や「！」などの記号は使わない。ただし、聞き取り調査のスク립トや、引用元にもともとそういう記号が使われている場合などは例外。

3.5 その他

- ◇ テーマの設定は論文執筆において決定的に重要である。あまりに大きすぎる難しいテーマを設定しても、その論文の範囲内で解決できなければ意味がない。論文には<落としどころ>が必要である。
- ◇ 論文を執筆する際は、あらかじめ見出しや要点を箇条書きにしてメモにまとめておくのが定石である。いきなり文章にまとめようとすると考えがまとまらないし、途中で論理展開がぶれるおそれがある。こうした構想を練る方法としては、文化人類学者の川喜田二郎氏が考えた「KJ法」（川喜田 1967, 1970, 宮内 2004）や、より一般的なテクニックとして「アウトライン」を作成することが挙げられる（戸田山 2012）。
- ◇ 論理展開を明確にするため、見出しは番号をつけて構成する（1, 1.1, 1.1.1, ...）。
- ◇ 慣れないうちは論理の展開がどうしても一人よがりになりやすい。自分自身はわかっていると思っていることでも、他人が読むと理解できないことはたくさんある。そういうときは友人などに読んでもらって、論理の筋が通っているか意見を聞いてみるとよい。

4. 論文の体裁

4.1 習作論文

- ◇ 分量は、12,000字（400字詰め原稿用紙換算で30枚）以上とする。これは、学会誌に投稿す

る原著論文よりやや短めの量である。

◇ 論文に含めるべき項目は以下のとおり。

表題，著者名，概要（600字以内），キーワード（3語），本文，文献

◇ 執筆には原則として Word を用いる（ただし希望する場合は TeX でもよい）。あらかじめ配布するテンプレートを利用すること。これには，以下の書式があらかじめ設定されている。

➤ 用紙は A4 版を横書きで使用する。

➤ 註は各ページ下部に脚注形式で。

4.2 卒業論文

◇ 分量は，学科で規定されているとおり，20,000 字（400 字詰め原稿用紙換算で 50 枚）以上である。

◇ 論文に含めるべき項目は以下のとおり（カッコ内は必要に応じて）。

表紙，（まえがき），目次，本文，（付録），文献，（謝辞）

◇ 執筆には原則として Word を用いる（ただし希望する場合は TeX でもよい）。体裁や装丁は学科の規定にしたがう。あらかじめ配布するテンプレートを利用すること。

5 論文の成績評価基準

「卒業研究」，「専門ゼミナール B」および「専門ゼミナール A」（習作論文）の成績評価は，以下の基準でおこなう。

評価の観点	配点
1. 問題設定の適切さ，明確さ	15 (15, 10, 5)
2. 先行研究のレビュー	20 (20, 15, 10, 5)
3. 論証・結論の適切さ，明確さ	20 (20, 15, 10, 5)
4. 体裁（字数，文献，誤字等）	15 (15, 10, 5)
5. 努力	30 (30, 20, 10)

6 「卒業論文執筆 25 訓」

以下では，東京大学教養学部教養学科第三（1992）に記された「卒業論文執筆 25 訓」なるものを，当学部の実情にあわせて一部改変の上，転載する。

- 1) 何のために書き，誰に読ませるのかを忘れないこと。
- 2) テーマはなるべく早く決めること。勉強がおのずから系統的になり有益。
- 3) 文献，資料集めには意外に時間がかかるものと心得よ。
- 4) テーマの選択は論文の価値の半分を占める。なぜそのテーマを選んだのか，はっきり自覚せよ。
- 5) 資料等の面で，そのテーマによる執筆が可能かどうか，教員や先輩によく相談すること。

- 6) 目新しいことをいおうとムリするよりも、地道な研究を心がけること。まずそのテーマについての研究が現在どれ位の水準にあるかを知ること。研究史ないし学説史をおさえ、どういふ点が問題になっているか、問題にしうるかを整理せよ。ムダ骨折らずにすむ。
- 7) そのテーマに関する最新の論文、著書を読めば過去の業績がふまえてあることが多い。注や bibliography を手がかりにしてたどっていく。
- 8) 論文である以上、論じていなければならぬ。そのためには、論理的な根拠と事実による裏づけが不可欠。どちらかがかけると調査報告書、感想文となってしまう。
- 9) 6~8 の諸条件を満たしたら、自由に思いきって書いてみる。自分の問題意識にこだわれ。
- 10) 文章は簡潔、的確に。専門分野の用語の概念は確認する。やたらと新語はつukらない。どうしても使いたいときは定義を明確にした上で使うこと。「わかってくれるだろう」は通用しない。
- 11) カードやノートはおしまずに使え。ノートをとるとき、書誌事項はくわしく写しておく。最終段階であわてずにすむ。
- 12) 論文＝序論→本論→結論という構成。とくに序論の問題提起は明確に。ここで論文の印象がきまる。本論は結論にいたる学的手続きを正確に展開する。結論では本論を総括し、必ず序論の問題提起にこたえよ。
- 13) 分量はあらかじめ見当をつける。大体の構成をきめてレジメをつくってみる。何でもかんでも調べたことを書きつらねることは避ける。おくゆかしきことこそ第一と知れ。
- 14) 分量との関係で論点を絞ること。八岐大蛇になるな。
- 15) 注には (i) 本文を補足し、説明する、(ii) 出典を示す、の 2 種ある。(i) があまり長いのは感心しない。必要なことはなるべく本文中で論じ、余計なことは思い切りよく切り捨てること。(ii) には、引用の出所を示す場合と論証を省略する場合とがある。先人の説や論証の手続きを借りるのは必ずしも恥じることではない。ただし、その旨を明記することが肝腎。
- 16) 「孫引き」は最小限にとどめる。やむを得ない場合ははっきりと断ること。
- 17) 論文作成の手引き、manual の類をつねに手許におき、参照せよ。注の表記等様式の統一、体裁などにも充分に心を配ること。
- 18) ときには妥協も必要。どうせ undergraduate の卒業論文だとイナオレ。
- 19) どんどん書け。書いて書いて書きなおせ。へたな考え休むに似たり。
- 20) ああだこうだと声高に騒げ。誰かの耳に入れば反応があるかもしれない。
- 21) まえがきはあとがき。
- 22) 元気なときに書いておけ。カゼはひくもの、親は死ぬもの。
- 23) 噂を信じてはいけない。問題は直接たしかめよ。
- 24) 卒業論文＝8 単位。そのくらい時間はかけよ。

7 文献一覧

Booth, Wayne C., Gregory G. Colomb, Joseph M. Williams, Joseph Bizup, and William T. FitzGerald, 2016, *The Craft of Research*, 4th ed., Chicago: University of Chicago Press. (川又政治訳, 2018, 『リサー

チの技法』ソシム.)

Huff, Darrell, 1954, *How to Lie with Statistics*, London: V. Gollancz. (高木秀玄訳, 1968, 『統計でウソをつく法——数式を使わない統計学入門』講談社.)

石井クンツ昌子, 2010, 『社会科学系のための英語研究論文の書き方——執筆から発表・投稿までの基礎知識』ミネルヴァ書房.

伊藤修一郎, 2011, 『政策リサーチ入門——仮説検証による問題解決の技法』東京大学出版会.

荻谷剛彦・石澤麻子, 2019, 『教え学ぶ技術——問いをいかに編集するのか』ちくま新書.

川喜田二郎, 1967, 『発想法』中央公論新社.

——, 1970, 『続・発想法』中央公論新社.

川崎剛, 2010, 『社会科学系のための「優秀論文」作成術——プロの学術論文から卒論まで』勁草書房.

Miller, Jane E., 2004, *The Chicago Guide to Writing about Numbers*, Chicago: University of Chicago Press. (長塚隆監訳, 2006, 『数を表現する技術——伝わるレポート・論文・プレゼンテーション』オーム社.)

Morgan, Susan E., Tom Reichert, and Tyler R. Harrison, 2002, *From Numbers to Words: Reporting Statistical Results for the Social Sciences*, Boston: Allyn and Bacon.

日本社会学会編集委員会, 2018, 『社会学評論スタイルガイド (第3版)』日本社会学会編集委員会.

野矢茂樹, 2006, 『新版 論理トレーニング』産業図書.

小笠原喜康, 2009, 『新版 大学生のためのレポート・論文術』講談社.

酒井聡樹, 2007, 『これからレポート・卒論を書く若者のために』共立出版.

佐藤文広, 1994, 『これだけは知っておきたい 数学ビギナーズマニュアル』日本評論社.

杉本大一郎, 2003, 『使える数理リテラシー』放送大学教育振興会.

戸田山和久, 2012, 『新版 論文の教室——レポートから卒論まで』NHK出版.

東京大学教養学部教養学科第三, 1992, 『卒業論文執筆必携 第5版』東京大学教養学部教養学科第三.

Turabian, Kate L., 2007, *A Manual for Writers of Research Papers, Theses, and Dissertations: Chicago Style for Students and Researchers*, Chicago: University of Chicago Press. (沼口隆・沼口好雄訳, 2012, 『シカゴ・スタイル——研究論文執筆マニュアル』慶應義塾大学出版会.)

上田尚一, 2005, 『統計グラフのウラ・オモテ——初歩から学ぶ, グラフの「読み書き」』講談社.